

グレースケールの世界

須山正文

順天堂大学 消化器内科

医療の進歩とはどういうことを言うのであろうか？ 1980頃、癌の免疫学が発達し、10年もすると癌は免疫治療で治ると期待されていた。新しい抗癌剤や分子標的薬剤が開発され予後の改善はみられているが、いまだ膵癌や肝癌、胆道癌などの予後は不良である。

恩師である故白壁彦夫名誉教授や有山 襄名誉教授からは、早期癌を発見し、治療することが患者さんたちの予後を改善する唯一の方法だと教えられてきた。その教えのように早期の癌を診断することが根治につながっている。消化器画像診断研究会は明日の診療に役立つ症例検討会として有山先生が始められ、今は愛知県がんセンターの山雄先生にその志が引き継がれている。しかし、この領域の早期癌の発見は容易ではない。人生の半分をこの世界で生きてきたが、助けることができた患者さんは何人いるのかと、ぞっとする思いである。

さて、USとの関わりは仙台市立病院で研修していた頃である。私にはUSで何が分かるのも分からなかった時代であった。指導医の先生から『USで膵臓や膵管も見えるらしいよ』と教えてくれた記憶がある。まさか、と思っていた私が今日、肝胆膵の診断と治療にほぼ毎日のようにプローブを持っている。画質も改善された。雨模様の初期の写真を見ると、よく診断してきたものだと感じる。USをはじめCT・MRIともども白黒の世界であるが、どの社会にもあるようにグレイゾーンが存在する。気分的にははっきりした白黒の世界が生に合っていると考えているが、実際はそのグレイゾーンの中を生きているようである。画質のみならず、ドップラーや造影剤などを用いた画像に色を着けるのが流行っている。容易に判断できるようになってきたのはいいことで、少しは色つきの世界を覗こうと思っている。

US、CTおよびMRIなどの機器の進歩は目覚ましいが、助かる癌の診断に寄与しているか疑問を持つ日々である。血液や尿、便などの検査で早期膵癌が簡単に診断できる日が待ち遠しい。

なお、写真は消化器画像診断研究会を海外(グアム)で行なったときの討論風景である。研究会とレクリエーションがあり、親睦が深められ長いお付き合いをさせて頂いている。

